

# 京都市帝國大學經濟學會

# 經濟論叢

第九十卷 第四號

大正三十一年十一月一日發行

## 論叢

- 獨占の本質……………文學博士 高田保馬  
 地租の不公平可能……………法學博士 神戶正雄  
 道徳統計論概説……………法學博士 財部靜治  
 フイアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎  
 世界の貨幣交通……………法學士 作田莊一

## 時論

- 營業稅廢止論を評す……………法學博士 小川郷太郎

## 說苑

- 機械と勞賃との相互關係に就てのマルクスの見解……………經濟學士 山本勝市  
 丁抹の小農地設定事業……………法學博士 河田嗣郎

## 雜錄

- 配偶の有無と死亡率……………經濟學士 岡崎文規  
 爲替の安定か價格の安定か……………經濟學士 谷口吉彥

## フイアカントの社會學論（三）

米田庄太郎

### 四 「形式社會學の考察」

此の論文はさきに述べし如く、先づフイアカント氏が自から自分の社會學論の淵源を簡單に説述したるものとして、又次には同氏の大成せる社會學體系の綱要を、同氏自から始めて約述したるものとして、同氏の社會學を研究する爲めには甚だ重要な資料となるものである。

(1) トレルチ及び其の他の人々の例に従ふて、社會學に於ける形式の方針と歴史哲學的百科全書の方針とを區別する。形式の方針（形式社會學或は純正社會學或は一般社會學の方針）の考案は、始めてジムメルによりて、シユモラー年報に於ける著名な一論文に於て、左の如き意味に展開された。即ち社會學は歴史的な生活の一切の變動する内容の中にありて、常に形式的恒定性を表示する處の、人間團體内に於ける諸關係（*Beziehungen und Verhältnisse*）を取扱ふ可きものであると云ふ事である。而して純論理的には、此の社會學問題の呈出に對して、殆んど異議が加へ得られない。只疑問の起り得るは左の點に於てである。即ち此の如くに規定されたる學は、果して現

實に一の學として生存し得るだけ充分な内容を有するかと云ふ事である。ジムメルは其の副題名に於て、「社會化の諸形式に關する研究」として表示されたる彼の尨大なる「社會學」に於て、此の疑問に答へんと努力した。ジムメルは事實上同書によりて、實質的に社會學をより多く利益したか、又は損傷したかは、疑はれ得るであらう。余輩は同書に於て三つの構成要素を區別し得る。即ち其だ價値の大なる中核と、之を包む處の遙かに内容の少なき、しかも夫れだけ又範圍の廣い論究の二部類とを區別し得る。其中核的部分は團體内に於ける一定の最後の關係、例へば鬭争、服従或は劣位、距離等の如きものを、本質的に一の現象學的方法或は之れに接近する方法に於て論究して居る。而して此の中核は一方に於ては、基本的思想の變種の一列、及び他の學問領域の事實或は事態のあらゆる分析並に之れとのあらゆる對比（或意味では遊戲的性質を有するもの）を以て、又他方に於ては歴史的及び民族學的或は土俗學的實例の多數（根本的思想の解説の爲めには、少數の實例に限つた方が遙かに有益であつたと思はれるので、あまりに多數の實例を積み重ねたことが、却て同書の中核及び特有の意味を茫漠たらしめ、又同書を無益に尨大なるものとならしめた）を以て包まれて居るのである。同方針の眞の創設者として、吾人は此處に恐くはジムメルと同等にテインニスを擧げることが出来ると思ふ。但し夫れはテインニス自身の社會學考案に關する言述（明らかに他の方針を指示するもの）を看過し、只彼の天才的青年作 G.

meinschaft und Gesellschaft のみを考へる場合にのみ云ひ得られるのである。テーンニスは右の名なる著作に於て、人間生活の二つの基本形式を深く詳しく分析して居るので、實に其場合に彼は、其後發達せる現象學の意味に於て、經驗から概括或は普遍化されるよりは、より多く内部的體驗から汲み出される組織的論究を、歴史的考察と結び附けて居るのである。併し不幸にして、恐くは形式社會學の最も基本的なるものと思はれる此の部分は、近頃まで殆んど展開されなかつた。只フランツ、シユタウディングが基本形式の數を増加し (Franz Sautinger, Kulturgrundlagen der Politik, Bd. I. 1914)、又メツガーが之れに對應する道德の區別を指示したゞけである (Metzger, Gesellschaft, Staat und Recht in der Ethik des deutschen Idealismus, 1917)。

更に茲にタールドの名も擧げらる可きである。其の根本的思想に於て甚だ重要な彼の著作「模倣の法則」は、其の構造に於てジムメルの「社會學」に似て居るものである。同書の甚だ意味深き中核は、與へられたる模範の吾人の内心からの模寫 (Nachbildung eines Vorbildes von innen heraus) と稱し得られる處の模倣の種類を研究し、而して之を服従の主要根柢として論述して居るが、夫れは實に正當なる見解であると思はれる。又タールドは此處に右の態度の本質即ち特殊な内部的心服の一状態を論究するに當つて、現象學に近い方法を用ひて居る。併し右の重要な中核は、ジムメルの「社會學」に於けると同じく、一方に於ては多數の歴史的實例を列擧する冗漫なる議論、

又他方に於ては一の普遍的或は宇宙的事實としての摸倣の形而上學的意義に關する、冗漫なる論議を以て包まれて居る。ゾールケムも亦彼の「社會學的方法の諸規則」の中に、社會的事實の本質の研究及び其の嚴格に超個人的なる性質の確定に於て、余輩の理論に有益なる概念的貢獻をなして居る。尙ほ彼の著「宗教的生活の要素的形體」に於て、彼は集團的舞踏や集團的昂奮状態に於ける意識状態の分析によりて、集團意識論に貴重なる貢獻をなして居る。但しゾールケムも此處に矢張り現象學的方法に近づいて居る。更にマクヅガルの「社會心理學序論」は、獨逸の學界には殆んど全く知られて居ないが、しかも重要な一著作である。此處に服従の本質は自己卑下の一の特殊的本能に歸して説明せられ、夫れによりて此の問題に關するタールドの社會學的研究は、心理學的方面から補はれて居る。此の研究は著者にありては、確かに只彼の主要目的即ち倫理的現象の一理論を立てんとする事に對する、一の補助手段に外ならぬ。(但し其の理論に於ては倫理的現象は嚴密に團體内に於ける相互作用から引き出されて居る。)併し同書全體は同時に形式社會學の意味に於ける社會學の一片である。是れ同書に於ては、一定の事實は人間の性質から、殊に自己卑下及び自己感情の本能から、必然的に生起する相互作用の一系列に還元されて居るからである。終りにレオポルドの威光に關する著作 (Lewis Leopold, The Prestige) が挙げ得られる。同書に於ては、權威の二つの相異なる形式が分析されて居るが、夫れは本質的には權力

配分 (Machtverteilung) の二つの基本形式、組合的狀態と支配的狀態 (genossenschaftliche und herrschaftliche Zustand) に對應するものである。最後に著者 (フイアカント自身) の「文化變動に於ける恒定性」を擧げたい。同書に於ては一切の文化領域の一の純形式問題、即ち文化財の變動に於ける相對的恒定性が取扱はれ、其の説明は文化的統一體內に於ける相互作用の一定の種類に於て求められて居る。此の問題及び其の取扱は、形式社會學の領域に入るものである。是れ兩者は夫れに關係する文化財の特殊内容から、全く切り離されて居るからである。

(2) 右に述べたる思想及び傾向を更に展開すると、吾人は形式社會學に於て、既に問題の可なり大なる一部類を、根本的に取扱ひ得るのである。先づ第一に擧げらる可きは、吾人が内部的關係の近いか又は遠いかによりて區別し得る處の人的基本關係 (die menschlichen Grundverhältnisse) の研究である。其等の人的基本關係とは共同團體關係、是認關係 (又は權利關係とも稱し得る)、鬭爭關係及び權力關係 (die Gemeinschaft, das Anerkennungsverhältnis, das Kampf- und das Machtverhältnis) 等である。此の場合に於て最後の二者は、前者に於ては權力が相方から要求せられ、而して後者に於ては現存する權力の不平等配分が相方に於て是認されて居ると云ふ點に於て、區別さる可きである。テーンニスの大成業は、此處に外部に於ては分類の一層詳しく展開に導かれ、殊に内部に於ては事實の現象學的把握によりて大に深められた。是れ此處では最後の事

實、かくて更に他の事實に還元され得ない、隨ふて定義され得ないで、只體驗され又體驗に結び附けることによりてのみ理解され得る處の事實が、取扱はれて居るからである。要するに共同團體關係の特種的結合性は現象學的に把握されねばならないが、まさしく夫れと同様に是認關係に於ける是認或は尊重の特種的關係 (das spezifische Verhältniss des Geltenss oder der Achtung) も亦鬭爭關係及び權力關係に於ける結合性の特殊な種類も、矢張り現象學的に把握されねばならぬ。蓋し鬭爭關係及び權力關係に於ても、夫れが此處に解せられ、又概念的に限定される意味には、同様な結合性の存立して居ることが、分析によりて明かにされるからである。此處では右の兩者は單なる暴力關係 (einfache Gewaltverhältnisse) として考へられて居ない。暴力關係は一般に社會外的關係である。是れ相互作用の存在、即ち内部的(心理的或は精神的)關係の存在は、社會の本質に屬するからである。純暴力關係は只歴史的生活に於ける例外的及び限界の場合として現はれるだけである。順當的には鬭爭關係及び權力關係は規制されて居る。即ち鬭爭も亦權力行使も共に、一定の倫理的規範によりて拘束されて居る。而して其等の規範は假令何處にも事實上従はれて居ない時でも、内部的には是認されて居るので、此くて右の兩關係は是認關係と密接に結び附いて居るのである。此處に述べし基本的關係の分類全體が如何に根本的重要を有するかは、之を倫理學に於て適用せんとする皮想的な企だてに於て既に示されて居る。既にさきに述べ

し事から察せられる如く、特殊な鬭爭道德が存在し、又同様に特殊な權力道德も存在する。而して他方に於ては同様に共同團體道德及び是認道德が存在する。現在行はれて居る道德に於ける差異の大部分は、つまり其等の諸道德は異なる基本的關係に結び附いて居ると云ふことから生じて居るのである。併し種々なる哲學的大體系及び世界觀に於ても亦、基本的關係の何れか、根本的に重大なる勢力を振ふて居る。例へば基督教の教義に於ては、共同團體關係、カントに於ては是認關係、ニーチエに於ては鬭爭關係及び權力關係が、根本的に重大なる勢力を振ふて居るが如くである。

社會的關係の第二の根本的分類は、權力マクトの配分に關して立てられる。換言すれば權力、詳しく云へば優越權力（Übermacht）が一般に現存するや否やによりて立てられる。而して此の點に關して、組合的關係と支配的關係との區別（die Unterscheidung von genossenschaftlichen und herrschaftlichen Verhältnissen）が根本的に重要である。歴史的に考ふれば支配的關係は、吾人が國家と云ふ語を普通の用法に従ふて狹義に解し、かくて國家とは所謂階級國家を意味するものと解する以上、國家の階段に相應する。之れに反して國家の階段以前のより低い階段に於ては、政治的生活は組合的形式の下に行なはれて居る。かくて進化史的に考ふれば、權力關係は人類進化の後の階段に於て始めて現はれるので、而して同様な傾向は制限された意味で鬭爭關係に於ても、更



に一層制限された意味では認關係に於ても認められる。尙ほ此の發生的順序は同時に一の組織的意味を有する。即ち是認關係の本質からして、夫れは直ちに一の共同團體關係の存在を前定し、殊に之を夫れ自身の中に暗に含んで居ることが證示される。而して夫れに相應することが又鬭爭關係及び權力關係に就ても認められる。更に社會生活の歴史的形成に於ては、右の二つの分類が相互に交叉する。例へば家長的關係に於ては、一方に於ては不平等なる權力配分が行なはれて居るが、他方に於ては夫れは根本的調子に於て一の共同團體關係にして、即ち權力行使は慣習及び道德の支配の下に立ち、而して其の權力基礎を動搖せしめんとする總ての企だてに對して、更に鬭爭關係が存立する。尙ほ第一に區別された基本關係は決して其の純粹なる形式に於て現はれることなく、主として混合形式に於て現はれる。かくて國家は外部に對しては一の權力關係（時としては又鬭爭關係及び暴力關係）を意味し、内部に於ては、階級關係が重要となる以上は、矢張り一の權力關係及び鬭爭關係を意味し、而して其の場合に於ては主として一の權利關係及び一部分一の共同團體關係を意味する。

却說上に述べし二種の分類は、社會形式の學の意味に於て嚴密なる一の組織論、即ち思惟が夫れ以上に分解することの出来ない、隨ふて其の出發點となさねばならない最後の成分に於ける一の分類を與へんとするものである。此處に吾人は社會的生活の原本現象に到達する。而して夫れ

は概念的認識によりて把握されるよりは、寧ろ内的直観によりて把握される可きである。かくて余輩の分類の根柢に存する概念は組織的概念にして、夫れは同時に又最後の組織的概念を意味するものである。而して此等の組織的概念から家族、黨派、國家其他の人間團體の歴史的概念が區別される可きである。かくてさきに述べし如く、國家の如き歴史の構成物にありては、種々なる基本形式が相結合して居るのである。又法律或は權利は是認關係の一の歴史的形式である。而して吾人が人為的に右の二つの概念部類を、注意深く區別することを學んだ時には、夫れは社會學の研究上一大進歩を意味するであらう。かくて例へば大衆或は群集(Masse)と云ふ語は、一見すれば一の組織的概念であるが如くに思はれるが併し詳しく考察すると、此處に吾人は一般に一の歴史的概念を見出すのである。夫れは即ち傳説を有せず、様式を有せず、隨ふて深い結合をなさずして存立し、比較的強く偶然的影響に支配される一の人民團體の概念である。又將來に於ては、人々が例へば權力の本質を國家によりて説明せんとするが如きことは、最早起り得ないであらう。是れ歴史的概念によりて組織的概念を説明せんとするは、順序の顛倒であるからである。

吾人は更に集團生活の事實に關する問題の一部類が成立するを見る。夫れは全體意識、全體意志其他類似の事實に關する問題の一部類である。此處にも亦吾人は吾人自身の體驗を考へること即ち現象學的考察によりて、神秘主義の危険を避けるのである。此の考察は我意識と同様に、共

同生活の状態に於て體驗される我等意識 (Widewusstsein) の存在することを示す。されば全體意志或は全體意見は全く現實的なる或物、即ち一の共同生活に参加する總ての人々の一の統一的體驗である。但し夫れが統一的體驗であると云ふは、是れ此處に個人體驗は因果的に、即ち相互作用によりて結び附けられて居るからである。併し人々は此等の集團的體驗の意義を看過し易い。是れ吾人は心理的生活に於ける表面と裏面とを區別するに充分慣れて居ないからであり、又重要視されず注意されない心理的内容、潜在的見地及び準備をあまりに輕視するからである。例へば一切の道徳は一の全體意志に基づいて居ると云ふことは、全く正當である。併し此の場合に全體意志は、夫れが依て以て一般的憤怒及び非難として、又事情に應じて防禦の傾向として現はれる違法行爲、侵害、冒瀆などが起らない以上は、全く潜在的に存立するに止まる。此等の集團現象の重大なる意義は、夫れは行動及び思考の大方針を根本的に決定すると云ふことである。但し思考及び行動の具體的内容は個人的性質のものである。而して其の具體的内容が意識の表面に現はれて居ることによりて、夫れは唯一の内容と見做され易いのである。

更に人間の社會的本能論は社會學の一章を成す。是れ確かに心理學と社會學との限界にある一章であるが、しかも少なくとも今日の狀態にありては、矢張り社會學の論究の中に入り込むのである。而して此の章の對象は、例へば鬭争本能、保護及び養育本能、摸倣、共鳴等の如きもので

ある。此の章に於て最も重要な地位を占めるものは、恐らくはマクゾーガルの發見せる服従本能の研究であると思はれる。此の本能の現象學的分析は、眞實なる従順とは指導者の人格或は權威に自由に服従し、内心から歸依する一の態度である事を示す。而して此の自由な服従及び内心からの歸依は、一定の行動の根元となる恐怖及び外部的順應とは、深く相異なるものであることが覺られる。一は社會的現象として、他は社會外的現象として、相對立するのである。是れ服従は一の内部的拘束に基因するが、恐怖的態度及び外部的順應は、吾人が人間外的事物に對して行なふが如き、一の純外部的適合を意味するからである。

右の區別によりて吾人は更に、甚だ重要な一問題に觸れてくる。余輩の云ふ意味では其の中に何等の心理的力も働いて居ない以上、即ち相互作用が行なはれて居ない以上、社會外的現象である諸事實の一例、例へば經濟生活に於ける價格規制や傭主と傭人との關係の如きものが、一般の用語慣習に於ては社會的生活に屬するとして取扱はれて居る。而して團體生活の統一的把握が、現存する因果的結合の理由に依て余輩が嚴格な意味にて社會的と稱する現象の限界に止まり得ない以上、右の用語慣習は全然正當である。さはれ余輩の如く嚴密なる意味に社會的現象を解するに於ては、形式社會學は實際上團體生活の一切の現象を取扱ふものではない。しかも其の事夫れ自身は決して形式社會學に對する何等の非難或は反對をも意味しない。夫れ自身に於て統一

的に相結合する生活の諸事實が、一般に種々なる學問に配分されて居るので、一の學問が生活の總體を寫さんとする念を全然放棄するは、不可避的な事實であると思はれる。此處に吾人は社會學の他の方針、即ち歴史哲學的百科全書の方針はまさしく社會的事物の全體を總合の作用によりて把握せんとするものなるを憶ひ起す。併し其の目的が學的に價値ある仕方では現實に成就されるや否やは疑問である。尙ほ假令其の目的が成就されるものとしても、夫れが爲めに形式の方針は無價値であると推斷されないのであらう。是れ形式社會學の偏局性は學問一般の普通の偏局性であるからである。人若し夫れが爲めに形式社會學を非難するならば、同一の權利を以て心理學に對しても、心理學は人間の心理的物質的統一を無理に切斷し、而して心理的生活が其の有機的基礎に依存することを無視すると云ふ非難を、加へ得るであらう。さはれ此處に恐らくは、解決を待つ一定の問題、及び夫れと共に更に進んで行はる可き研究の出發點が存するであらう。

團體内の相互作用は、此の章に於ては最後の過程に還元され、又夫れによりて分析される。而して其等の過程或は勢力は吾人の全態度の上に最も強大なる影響を及ぼすとは云へ、しかも主として注意されずに又は無意識的に行なはれると云ふことは注意すべきである。各人は彼の環境と接觸して生活し、而して其の接觸は一定の態度或は行動の仕方への其の環境の意向及び準備に就て彼を覺らせ、又彼は其の環境に對して態度の如何なる可能性を有するかを、彼に指示するものである。併し總て其等の事は全然意識の裏面に於て行なはれ、しかも彼の態度の全體を決定す

るのである。協働の總ての種類に對して、一切の影響に對して、總ての權力推移及び權力形成に對して、最も深い原因は右の如き接觸に於て存する。されば社會的均衡及び其の推移は全然或は主として無意識的諸勢力に基因するのである。

(3) 上に述べ來りし事によりて、形式社會學の方法に關する或物が既に推察される。方法に於て、形式社會學と歴史哲學的百科全書的社會學との決定的な差異が示されるのである。而して此の事は、吾人が先づ分析と總合との協働を考へる時に、既に明らかに認められる。總合の力に於ては、形式的方法は歴史哲學的方法に劣る。併し分析の力に於ては、夫れは歴史哲學的方法に遙かに勝る。而して後の點は決定的である。是れ分析は一般に、近世科學が依て以て事物の奧底に入り込む道具であるからである。近世に於ける自然科學殊に力學の大發展を考へて見よ。總合の力に於ては、古代希臘哲學者はガリライ及び彼の後繼者に決して劣つて居ない。併し古代希臘哲學に缺けて居て、而して自然研究をして其の成業を始めて可能ならしめたるものは、實に觀察と純思惟、先驗的なるものと經驗とが相結合され、而して最後の、夫れ以上に還元され難き或は説明され難き事實及び關係に進入する處の、其の徹底的分析である。かゝる分析は只一方針をとり得るだけである。而して其の方針と云ふは即ち、少なくとも始めには全く歴史的社會的生活の全體の把握を與へんとはしないで、又歴史的社會的生活の如何なる法則をも確立せんとはしないで、又個別諸科學の結果を總合せんとはしないで、少なくとも先づ第一には、一切の精神科學

的研究に於て基本概念として用ひられる概念及び類型の一系列を、純粹に明晰に作り上げんとするものである。

形式社會學の方針が最後の事實にまで進入し得るのは、先づ第一に夫れは單に經驗から普遍化或は概括せんとするだけでなく、更に事實の一系列を先驗的に確定し得るからである。換言すれば夫れは常に歸納的に進むだけでなく、更に又一層高い度合に於て、現象學的に進むからである。社會生活の基本的事實は、吾人は總て吾人の本性上社會生活の眞中に立つものなるが故に、吾人總てに直接に、體驗に於て隨ふて内部的經驗に於て與へられて居る。既に舊研究（歴史哲學的百科全書的研究）も明かには意識せず、隨ふて計畫的には利用して居ないが、併し確かに一部分右の道を歩んで居た。しかも此の方法の意識的及び計畫的運用は、現象學の發見及び發達によりて始めて新たに一般的に可能となつたのである。而して此の現象學的方法と相並んで、組織的基本事實及び類型の歴史的形成が取扱はれる何處に於ても、歸納法が自から有效に運用されるのである。

先驗的考察法と分析の力とは甚だ密接に結合する。而してかくの如き形に於て規定されたる方法が、如何に根本的に重要であり得るかを、余輩は此處に更にも一度指示して置きたい。夫れ學は經驗の一累積よりも以上のものである。決して只熱心な觀察と蒐集とによりてのみ、新力學及び自然研究が一般に形成されたのではない。而して第十七世紀及び第十八世紀に於て建設された

力學は、一切の自然科学の基礎となつた。社會學の友人及び歸依者は屢々社會學から同様な作業を期待した。されば社會學は又其の一般的方法に於て、力學に従はねばならないのでないか。而して此の作業は、若し夫れが一般的に可能であるならば、恐らくは吾人が單なる蒐集及び比較を以ても、亦概括、歸納及び總合の方法を以ても満足しない時のみ、可能であるのではないか。

却説フイアカント氏は以上述べ來りし論文「形式社會學の考案」に於て、同氏の社會學論を大體上完成されたので、かくて千九百二十三年に「社會學」(Gesellschaftslehre. Hauptprobleme der Philosophischen Soziologie. 1923.)を公にし、右の考案に従ふて社會學を組織的に論述された。而して同書はロックス氏の「社會學原理」(Ross, Principles of Sociology. 1920.)やバーク及びバーゼス兩氏の「社會學概論」(Park and Burgess, Introduction to the Science of Sociology. 1921.)に次で現はれた形式社會學上或は純正社會學上の輓近の好著作である。吾人は同書によりてフイカアント氏の社會學論が、實質的に如何なる實を結んだかを學ぶことが出来るのである。而して余は之を余の純正社會學の内容と比較して非常に興味を感じて居るのであるが、其の事に就いてはやがて公にする余の「純正社會學」中に詳しく論述することゝし、此處には次節に於て只同書の緒言及び序論中に述べられて居る同氏の社會學論に就て、尙ほ少しく述べるだけに止める。但し右の社會學論は同氏の最とも圓熟せる社會學論を簡明に論述したるものとして、特に注意す可きものと思はれるのである。(未完)